

神戸外大ハビタット 2025 年春インドネシア派遣

神戸外大ハビタット / 伊藤晴菜(国際関係学科・学生) & 黒田彩華(第2部英米学科・学生)

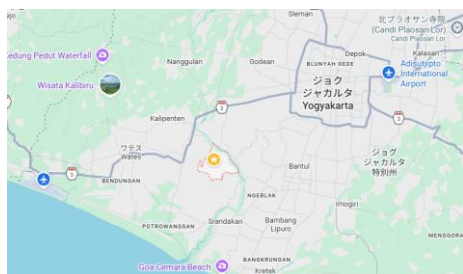


はじめに

神戸外大ハビタットは、国際 NGO “Habitat for Humanity” の学生支部として、毎年春に海外で住宅建設のボランティアを行っている。Habitat for Humanity は、1976 年にアメリカのジョージア州で設立された国際 NGO であり、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現を目指し、世界 70 ヶ国以上で住宅の建築支援に加え、衛生設備の設置支援や建築技術の普及、災害に強いコミュニティ作りなど、住まいの改善・確保、コミュニティ全体の発展を目指した支援に取り組んでいる。日本では、Habitat の活動を支える学生団体は全国で 34 を超える。その1つが神戸外大 Habitat、通称「こべたつ」である。特に、東南アジアの国々で住宅建設支援を行うほか、現地の世界遺産や伝統的な場所を訪れ、人々と交流することや文化の違いを肌で感じることも活動の一環としている。2025 年はインドネシアのジャワ島でボランティア活動を実施した。

インドネシア国ジャワ島の派遣地と住環境問題

今回訪れたのは、Habitat が GV (グローバル・ヴィレッジ) として住宅建設支援のボランティアを継続的に行ってきているジョグジャカルタ特別州内のトゥクソノという村である。



地図:ジャワ島(上)と訪問先のトゥクソノ村(下):google map

村では約 2700 世帯、8500 人が、農業や畜産中心の生活を送ってきた。しかし、住民の約 44%が貧困世帯であり、構造的に脆弱な家が多くなってきた。インドネシアは、依然、多くの貧困層の人々を抱え、貧困率は、都市部で約6%、農村部で約

10%だが、今回訪れた地域では、その平均値を遥かに越える多くの貧困層が、不十分な住居に住んできたことになる。特に、水やトイレなどの衛生関係設備の不十分な住宅が多々見られたり、一つの住居に複数の世帯が同居したりするなどの状況が生じてきたという。また、この地域の児童に高い割合で見られる発育阻害は、こうした住環境の問題と密接に繋がってきた (Indrakusuma,T.et al. 2024; Habitat for Humanity Japan, 2023)。

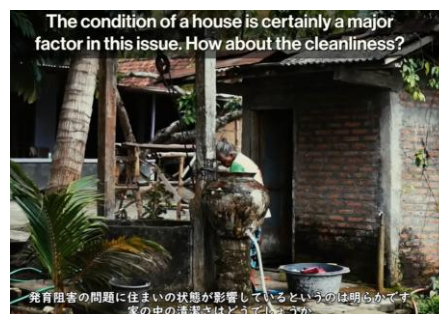


写真1:トゥクソノ村のかつての住居の様子 (Habitat for Humanity Japan, 2022)

ハビタット・ジャパンの GV 事業への参加

トゥクソノ村を含むジョグジャカルタ特別州の村々での住居建設支援ボランティアに継続的に注力してきたのが、ハビタット・ジャパンである。今回、神戸外大ハビタットは、そうした国際協力の継続的な流れのなかに加わらせていただいたことになる。具体的には、私たちは国の品質基準に準拠した家の建設を目指し、住宅建設支援を行った。2025 年 2 月 24 日から 28 日までの5日間 日本全国の Habitat の学生支部8団体から計21人の学生が参加し、インドネシアの Habitat のコーディネーター及びボランティア4名とともにボランティア活動を行った(写真2)。



写真2:学生メンバーとホームオーナー(ハビタット撮影)

学生メンバーの中には建築に関する知識を持っている者もいたが、大半は建築作業を行うのは初めてだった。派遣先地域に関しての基本的な情報はハビタットから事前に提供されたが、派遣地の住居の状況など、他の現地事情については、派遣前のオンラインでの会議でチームとして学びを深めた。学生支部間での交流を通じてオンラインで共有することもあった。

住宅建設の作業: 柱の組み立てとセメント注入

現地での作業は皆で協力して行うものや比較的単純なものが多く、建築の専門知識がなくても十分に貢献することができた。私たちが行った実際の作業内容を紹介する。

鉄を曲げる作業は、手動の専用機械を用いて、約 200 本を製作した。長い鉄棒を見本通りに、角が正確に 90 度になるように曲げる必要があり、この点が難しかった。一辺約 10 cm の四角に曲げた鉄を、細い金属棒を用いて等間隔に長い鉄棒に通していく。柱の長さは約 3メートルあり、この作業には 5人で 30 分から 50 分ほどの時間を要した(写真3)。



写真3: 柱の組み立て作業(ハビタット撮影)

セメント作業も基本的に手作業となった。機械を用いればセメントを作ることは容易だったかと思われるが、作業場は山奥にあり、機械を運んでくることも困難だった。また、人の手で作業すると、コストが掛からない。ハビタットの活動では「できる限り安く、だが質の良い住居を作る」ことが重視されている。セメントは、専用の粉と水をスコップで混ぜあわせて作り、バケツリレーで家の土台まで運んで流し入れた。現地のボランティアと息を合わせることに肝要な作業だった(写真4)。



写真4: セメント作業(ハビタット撮影)



写真5: 完成予定の住居 (Habitat for Humanity Japan, 2022)

振り返って

インドネシアは食文化も言語も衛生環境も日本とは大きく異なる。私たちが訪れた作業場のトイレには、小屋の中に便器が1つ、排泄物を流すための水がためてある桶、そしてシャワーがあるだけであった。また、トイレトーパーが常備されているとは限らないため、常にポケットティッシュを持ち歩く必要があった。しかし言葉が通じなくても、感謝の気持ちを表すことや相手を気遣うことはできる。実際にボランティア作業を行っている際にも、現地の方と交流する際にも、そのことを感じた。建築のことを何も知らずに、ただ「家」に興味があって参加したが、インドネシアの人々の温かさに触れ、今後もインドネシアと関わっていきたいと思った、人生の中で心に残る経験となった。

知識として知っていた衛生環境や住宅文化の違いを、実際に目の当たりにすることで、その差の大きさを身をもって感じた。ボランティア活動は「してあげる」ものではなく、「させてもらっているという感覚」があり、現地の人々から学ぶことが多くあった。そして何より自分たちを温かく受け入れてくれた方々への感謝が大きい。この学びと感謝を忘れず、今後も様々な活動に取り組んでいきたい。

主要な参照・参考文献

Habitat for Humanity Japan, 2022, *Habitat Japan. Newsletter*. 44. August 2022.

Habitat for Humanity Japan, 2022, “Housing Needs in Tuksono, Yogyakarta, Indonesia”

https://www.youtube.com/watch?v=V_T63SiGSug

Habitat for Humanity Japan, 2023, 「【インドネシア】すべての人々の健康を守る、地域拠点施設が完成」

<https://habitatjp.org/archive/21623>

Indrakusuma, T. et al., 2024, “Analysis of “Extreme Poverty” for the special Region of Yogyakarta in Indonesia”, *Asian Journal of Agricultural Extension, Economics & Sociology* 42.6,

https://ageconsearch.umn.edu/record/368025?utm_source=chatgpt.com&v=pdf